

学校園教育推進サポート事業 報告書

学 番	1501	学校名	新津第一小学校	校長名	小川 和宏	作成者名	長谷川 靖
学校教育推進サポート担当者名			大倉 佳代子			電 話	0250-22-0069

1 実践のテーマ

確かなアセスメントに基づいた、グレーゾーンの子どもに寄り添う生徒指導  
 ～今「気になる」子どもから、これから「気にしなければいけない」子どもへの転換～

2 テーマ設定の理由

どんな子どもであっても、楽しく学校生活を過ごし、確かな学力を身に付けてほしいというのは、私たち学校現場にいる者と保護者の、共通で最大の願いである。

当校は前年度『学校園教育推進サポート事業』で、幼保こ小連携に取り組んだ。そのおかげで、すべての1年生に不登校傾向が全く見られないという大きな成果を得た。一方で他学年に目を向けると、いわゆる「気になる子」は表面的にも多数在籍する。担任による、日頃からの弛まない努力によって、問題行動が顕在化するまでには至っていないが、そこには知的グレーゾーンによる学習不振、発達障がいによる生きづらさや友達関係のトラブル、家庭環境や貧困、外国籍等の諸問題に起因する様々な葛藤など、内面的に苦しんでいる子どもが多数存在する。

当校では、前年度、夏季休業中の職員研修として、上越教育大学いじめ・生徒指導研究センター長、高橋知己教授を招聘し、不登校への対応についての研修会を行った。その後、高橋氏の研究グループが独自に行っている文部科学省委託事業の話を受け、無料（次年度以降は有料）で全校児童のアセスメントを行っていただいた。子ども一人一人がタブレットを活用し、『学校生活・家庭についてのアンケート』に回答した。その結果が12月下旬に分かり、高橋教授から直接レクチャーを受ける機会を得た。その結果、一人一人にどんな生徒指導リスクが潜んでいるかが如実に明らかになった。担任や管理職の見立てとほぼ一致する子どももいれば、現在は必ずしも問題行動が見られない場合もあった。個々のリスクを事前知ることによって、そのリスクを回避する関わり方を該当児童とした上で、未来を予想した集団づくりをしていく必要性が、今後高まっていくと考えた。担任が漠然と考える「気になる子」から、確かなアセスメントに基づいた「気にしなければいけない」子どもを事前に把握し、積極的な生徒指導をしていくことは、学級経営、生徒指導上はもちろんのこと、学校経営上の最大のポイントと考えた。

また一昨年度、中学校区単位で『子ども支援コーディネータ加配配置事業』により、週1日、中学校の生徒指導主任に常駐してもらった。その際は、支援が必要な複数の子どもに担任と共に寄り添っていただき、十分な成果が出た。今年度は配置されていないため、そのときと同様、グレーゾーンの子どもに個別に寄り添って、学習活動も丁寧に進めていきたい。

3 実践内容

- (1) すべての教師が一致して取り組む3つの「感情」と1つの「力」の醸成を全教職員で共有
- (2) 上越教育大学いじめ・生徒指導研究センター開発の全校児童のアンケート（SLQ 学校生活アンケート）実施とアセスメントの活用
- (3) すべての子どもが学びに向かうことを目指した「分かる・できる・実感する」授業づくり
- (4) 「生徒指導リスク」を踏まえた、担任と複数の教師による学習・生活支援

#### 4 実践計画

実施時期	実施内容（研修会、先進校視察、授業公開等）
前年度中	アンケート結果に基づく「生徒指導リスク」の個別洗い出しと共有
4月初旬	新3・5年生のクラス編制でのデータ活用
4月上旬	校内独自の「学校生活アンケート」①の実施（結果による実態把握）
4月上旬	職員研修①（「学校生活アンケートでの実態把握を基にした手立ての検討と生徒指導の方向性の共有」）
4月中旬	研究全体会（研究主題 「学びに向かう力を育てる授業づくり～やらされている感「0」の授業を目指して～」）
5月中旬	子どもを語る会①
5月～6月	SLQ学校生活アンケート作成までの打ち合わせ
7月	SLQ学校生活アンケートの実施
7月～	授業研究（一人一授業）
10月	校内独自の「学校生活アンケート」②の実施（①との比較）
10月下旬	子どもを語る会②
11月上旬	上越教育大学高橋先生によるSLQ学校生活アンケートのアセスメント解説研修（学級担任ごとに）による「生徒指導リスク」の個別洗い出しと対策検討
通年	SLQ学校生活アンケートでのアセスメントを活用した授業づくりと各対応ミーティングでの検討
1月	校内独自の「学校生活アンケート」③の実施（①との比較）
2月下旬	今年度のまとめ、報告書の作成

#### 5 成果

##### (1) すべての教師が一致して取り組む3つの「感情」と1つの「力」の醸成の共有

4月に学校独自の学校生活アンケートを実施した。アンケートの結果から、自己肯定感が低い子どもの割合が、学年が上がるにつれて増加していることが浮き彫りになった。当校では、この状況を学校内外での問題行動（不登校・渋り・人間関係のトラブル）につながるサインの1つと捉えた。そして、問題行動を未然に防止し、「生徒指導リスク」のある児童が目指す姿に近付いていけるように、実感させたい3つの感情（「自己肯定感」「自己存在感」「自己有用感」）と1つの力（「自己指導力」）を醸成



させていくということを教職員全員で共有した。

各学級担任は、子ども個々の日常の姿や現状を捉え、2年生以上は前年度のSLQ学校生活アンケートのアセスメントを参考にしながら、子どもの見取りを行った。また、子どもを語る会で、全教職員とも共有した。

R7年度 ● 学年の取組			
自己指導力	自己存在感	自己肯定感	自己有用感
<p>できるように なったことの 振り返り</p> <p>学年のあちこちラ ンクに開かれた 振り返りシート 「やっぴんたい こ」</p> <p>元氣（バーティ カル）なでっか くて花丸をため よう</p>	<p>ここに大作 業（自立）</p> <p>自立につながる 意見を出し合 って広げる</p>	<p>親生関係 年長で教師！ お祝い</p> <p>日直のスピー チ</p> <p>自己紹介・サ イン集め・開 校会！・か わい会！</p>	<p>全職員 Good job カード</p> <p>通んてんのため に～していた をみんなに紹 介する</p> <p>褒めと誇 付箋に胸の人 へ感謝のメッ セージ</p>
<p>1年生の重点 チャレンジ力・コミュニケーション力一歩広 げて挑戦することが多い児童。初めてのことに見通しをたせ、スモールステップ で、振り返りシートなどを通じて、決めたことやできたこと、思いやりの気持ちを共有する。</p> <p>2年生の重点 褒めと誇の付箋をみんなに紹介する 褒めと誇の付箋をみんなに紹介する</p>			<p>学年別で、最 低にこそを紹 介、伝えたい</p>

##### (2) 上越教育大学いじめ・生徒指導研究研修センター開発の全校児童のアンケート（SLQ 学校生活アンケート）実施とアセスメントの活用

今年度も、上越教育大学いじめ・生徒指導研究研修センターによるSLQを実施した。上越教育大学の高橋知己先生から来ていただき、学級担任一人一人にアセスメントの解説研修を行っていただいた。この研修により、次のようなことを得ることができた。

- ①学級担任の見取りと同様の結果となった子どもに対しては、より明確な「生徒指導リスク」が浮き彫りになり、その子どもに対する手立ての再確認と修正をすることができるようになった。
- ②学級担任の見取りと真逆な結果となった子どもに対しては、これまでのその子どもに対する手立てを大きく見直すことができるようになった。
- ③学級担任の見取りでは「生徒指導リスク」を感じなかった子どもに対しては、新たに手立てを講じることができるようになった。

アセスメント解説研修により子ども個々の状況を正確にとらえ、個々への手立てを明確に具体的に構築することができた。授業づくりや学習・生活支援、そして、不登校やいじめ、特別支援等の各種校内対策ミーティングへも活用することができた。



### (3) すべての子どもが学びに向かうことを目指した「分かる・できる・実感する」授業づくり

子どもの実態と昨年度の授業研究の結果を基に、今年度の研究主題を「学びに向かう力を育てる授業づくり～やらされている感「0」の授業を目指して～」と設定した。すべての児童が学びに向かい、やらされている感「0」にするためには、アセスメントを基にした個々の「生徒指導リスク」を把握し、児童に適したより具体的な手立てを講じることが必要である。各授業者は、自己の見取り及びSLQにおけるアセスメントと授業のねらいや手立てとを往還しながら、よりよい授業づくりを目指すことができた。



児童アンケート「授業で、課題解決に向けて、自分で考え、自分で取り組んだ」の項目では、前期88%、後期89%であった。教職員アンケートの授業で目指す姿を達成していることについての具体的な項目「Iできないことも粘り強く考える」では前期73%、後期100%。「II課題意識を確かにし、探求する」では前期74%、後期94.1%。「III全員が課題に向き合う」では前期95%、後期100%であった。

### (4) 「生徒指導リスク」を踏まえた担任と複数の教師による学習・生活支援

子どもの困り感や問題行動に対して実施している各ミーティング（「不登校対策委員会」「いじめ対応ミーティング」「特別支援校内委員会」等）では、学級担任や関係職員による情報や見立て等を基にして、支援の方向性や手立てを検討している。そこに、SLQにおけるアセスメントから浮き彫りになった「生徒指導リスク」を活用することで、より子どもの実態に合った具体的な手立てを講じることができた。また、日常的な学年内での子どもへの対応ミーティングにも同様に活用することができた。